

の本源なるを以て、自ら其の本分を辨へ、十分に

之が注意を加へ、其の子の成長するが

儘に、放擲して顧みざるが如きことな

く、不良の習慣不正の心術を傳達する

が如きことなきを要す人誰か其の子の

賢明善良なるを欲せざらん。誰か其の

子の富貴榮達を希はざらんされば、世

の母として、幼児保育の任を負ふもの

は、須らく幼児を愛に溺れしめず、又

叱咤を加ふるが如きことなく、又虚言

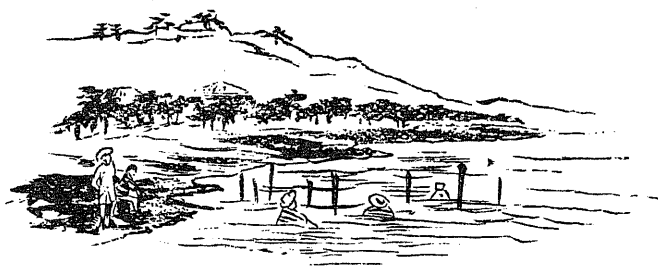
を爲して幼児を欺くことなく、不正な

ることは、見聞せしめざるやう注意

し、賞罰のことは、最も心を用ゐ常に

清潔と整正との習慣を養成するを要

す。



鈴虫やなき揃ふたる千草かな

余が實驗せる特殊

なる家庭と兒童(承前)

岩手縣師範學校

菅原文一郎

先づ酷いことには、この生徒が漸やく十歳であるが學校からかへると、まづその日の學校で教へられたことを復習し、夫れからあとは、四書とか五經とかを教へるといふことだ、活動の盛んな子供をして、二時間も三時間もついでにやるといふには、驚かざるを得ないのである、夫れで間々には、苦し

みにたへないで、かくれて遊びにゆくといふよ
 一な、事があれば、朝夕教への時ごとに、譬を引
 いて訓戒するそーだが、大人でもひどいことを、
 活動の盛んな幼童にとりての事だから、いかに苦
 しくあつたかは、聞いたばかりでも驚いてしま
 ふ、併しかういふと、一概に祖父をあしくいふよ
 ーだけれども、又この老祖父は、已に七十歳をこ
 え、餘命も覺束ないからして、どーか己の生きて
 居るうちに、この孫をして一人前の人にして見た
 いと、折角いうそーだから、只其の情の切なわま
 り、小供のため宜しくないとは知りながら、本意
 ならずも務めたであらうと思はれる、また學問と
 いひ、經驗といひ、すべてについて抜目のない老
 人だから、ひとり小供の體育ばかり冷淡であるど
 うことは、どーしても信ぜられぬのである、又

この老人か、一度も小供を叩いたといふことがな
 く、他所の人が悪戯したとて、小供の頭を叩くの
 を見ても、どーせ叩かば尻でも間に合ふものを、
 小供のためよろしくないなどいうて、家内の人た
 ちにも、時々注意するといふほどであつたとい
 うから、體育上にも決して冷淡でないといふ所が、
 充分氣をつけてあつたといふことを保證するによ
 い。

あらゆる點から見ても、この老人が、小供を育て
 る上について、いかに心をいたためたかはわかるの
 である、先づ書物を讀ませても、飽きた時など
 には、裏の果樹園に連れゆきて、いろ／＼の歌や
 詩を教へ、夫れからまた來て讀む、夫れでも飽きさ
 ぬ時などには、今度は勉勵の方便として一枚を讀
 んだならば、一厘玉（飴ニテツクリ菓子）を一

個づつ與へるといふよーな約束をして、論語なり、孟子なりを讀ませるといふ熱心、兒童の苦しみは勿論だが、七十にあずる老人の骨折りも、なぐさみでは出來たものでない、そして一日に（放課後日々）七十五枚を讀んだのは、一番多くあつたなご、日誌にかいてあるそーだが、よくその小供にたゞして見たところ、讀む間、おちーさんは、虫眼鏡を以て守て居るからわからないけれども、友だちが遊びにどて誘ひに來て居るし、早くやめたいから、時には、おちーさんの側見したとき、そつこり讀んだふりして、三四枚をはねたこともあつたど正直にかたりました、折角家庭では、立派に育て、居るものを、かゝる言葉をき、棄てにするは、所謂人の子をそこなうものだと思ひましたから、夫れはよくないねと言輕く注意しました

たが、この兒童の境遇にしては、夫れはわるいごまでは、どがめかねました。夫れから今一つ感服しない事は、他でもありませぬが、どかくこのおちーさんは、老體であるから、寒氣を感ずるからでありませよー、寒中寝るときには、布団を炬燵で焦げるほどあつく暖めて寝るといふのです、そしてこの孫も一所にねせられるそーですが、一方は幼い小供のごです、熱つくてたまらない、そこでそつと足をわきの方へ出して寝る、やがて足も冷えて寒くなつたから、中に入れる、そーすると折角暖まりて居るおちーさんにつめたい足がふれるから、おちーさんは驚いて目を醒ますといふやうな有様、わゝかゝる點からわの兒童をして、弱くしたなど聞くとき既に、口惜しくありました、その他よく聞いた

ならば、参考にするやうな事が、澤山ありましたらうけれども、先づ私のきいたのはかういふものでありました、此のれぢーさんにしてこの小供に適する體育を施されたならば、如何に圓滿な發達をするであらうかと、誠に氣の毒でたまりませんでした、かゝる育て方をへて来たのですから、學校に來て他の薪をさきり炭を負ふというよゝな育て方の小供と同一視されて、活潑に活潑にといはるゝのも、なるほど苦しくてたまりなかつたでありましたらう、世の育児者には、兒童は濃厚なるよりは、寧ろ粗暴に傾くほど活潑なのはよいというて、弱い兒童をしてその依て來る所をも確めず、夫れ遊べ夫れ駈けよ、未來の日本軍人が、夫れではいけないなど、一も二もなく獎勵する人があるときいたが、勿論さうなけらねばならぬまで

はあるけれども、中には今のよゝな育て方の小供もありますから皆平等にやられたものでありませぬ、夫れだから一人の兒童にしても、その一言一行みな其の由る所を究め其の源から大に改良するとも、獎勵するともしなければならぬと思ひます、一向前後のまどまりもない事ではございませぬが、小供を育てる方々の、少しでも参考とならば、私の満足する所でございます(二元)

白露の色は一つをいかにして

秋の木の葉を千々に染むらん

富士南麓地方の子守歌

駿河 西村和一郎

一、ねんねんよー、かんかんよー、わしらんお坊ちゃんを、誰が、かまつた、誰もかまひもせぬ